【演習１　福祉教育プログラムを磨く】

福祉教育カリキュラム（単元）タイトル

地域で暮らす障がい者の生活を知ろう

実施（未・済）
一部実施済み

都道府県・指定都市	所属	氏名
茨城県	東海村社会福祉協議会	川上　有里

構成の考え方：①カリキュラム（単元：各プログラムの集合体）＞ ②プログラム（各活動の集合体）＞ ③アクティビティ（プログラム内の各活動）

現状分析（地域状況、課題と強み）

地域の状況

東海村は約 38,000 人。村内には小学校が６校，中学校が２校，県立高校が１校ある。県庁所在地からも近く，村内を北から南まで横断しても約 15 分程度しかかからないコンパクトな村である。

障害者施設は，入所施設（主に知的障害），グループホーム，通所施設（生活介護，就労支援，放課後等デイサービス，児童発達支援）があり，そのうち生活介護（障害者センター）と児童発達支援事業所は村社協が運営している。以前は，障害者センターと近隣の小学校との交流事業があったが，安全確保の観点から東日本大震災をきっかけになくなってしまった。

解決すべき課題

ある小学校の先生から「以前，障害者入所施設との交流があったが，障がい者＝怖いというイメージを持ってしまったかもしれない」との話があった。福祉教育の授業を毎年行っている学校であったが，他施設と交流をしていることを知らなかった。また，子どもたちへ正しく障がいを理解できていない現状がある。

大切にする強み（ストレングス）

・村社協が障がい者の通所施設を運営している。
・村の人口規模と面積が小さいため村社協と村内通所施設が顔の見える関係性が築けている。

学習テーマ

□子ども　☑障がい者　□高齢者　□防災　□貧困　□孤立
□まちづくり　□その他（　　）

上記の□の中から該当するテーマにチェック☑を入れてください。

カリキュラムの目的

・障がいの特性やコミュニケーション，介助方法を学び理解を深める。
・当事者の方々から日常生活の話を聞くことで，多様な生活方法を知る。
・児童の発表が，保護者も福祉について考えるきっかけを作る。

カリキュラムの構成

位置づけ：【教科等】総合的な学習の時間
：【事業】福祉教育推進事業

カリキュラムの対象（受講者）	会場
小学６年生（１クラス：２０～３０名程度）	小学校，総合福祉センター「絆」（社協の所在地）
主催者（講師、協力者） 村社協職員（福祉教育推進事業担当，障害者センター職員），障害者センター利用者，視覚障がい当事者，福祉の出前講座サポーター（ボランティア）	**経費・財源の集め方** 赤い羽根共同募金（福祉教育推進校助成金） ⇒外部講師（当事者）への謝金支払い

	プログラム内容	プログラムのねらい	準備すること・配慮等
事前学習	「福祉」について調べ学習をする	１回目の導入授業につながる調べ学習をし，自分にとってのふだんのくらしのしあわせとは何かを考える	村社協が用意したワークシートに沿って調べ学習をする。
１回目	「福祉」とは何か，事前学習の内容をもとに，自分ができることを考える	「福祉」は特定の誰かのためのものではないということを知り，２回目以降の授業につなげる	意見交換する時間を設け，発表をして意見を共有する。
２回目	・視覚障がい者の日常生活の様子（料理，洋服選び，仕事）をまとめた動画を観た後に当事者の方へ質問をする ・アイマスク体験（硬貨等の識別や視覚障がい者の介助方法を学ぶ）	視覚以外にも触覚や嗅覚などを使い，道具など工夫をすればわかることがあることを知る	・「見えなくて大変だ」「怖い」で終わらせないようにストレングスに着目する。 ・アイマスク体験キット，硬貨・シャンプーボトルを用意する。
３回目	・障がい者センターの活動内容（紙すき）を動画で見た後に，リモート交流をする ・利用者が作成したはがきを活用して絵手紙交流をする	一人ひとりのできることに着目した作業風景を観て，多様性について考える	・人数分のはがきを用意。 ・リモート交流ができるか学校のネット環境を事前に確認しておく
４回目	グループに分かれて，これまでの授業で興味を持ったことについてまとめる	これまでの学びを振り返りまとめることで学びを深める	・模造紙，ペン，授業風景の写真を用意。 ・ストレングスに着目した発表になるようサポートする
事後学習	授業参観での発表会	子どもたちの発表をとおして，保護者も福祉について考えるきっかけとする	発表の前に保護者へもこのカリキュラムの趣旨や「福祉」について説明をする。

<プログラム・カリキュラムづくりのプロセスでの工夫点>

・これまでの福祉教育では車いす体験やアイマスク体験等単発の体験学習が多かったが，今回のプログラムは当事者の体験を聞いて考える時間を多く取った。
・体験学習は身体障がい（肢体不自由，視覚障害，聴覚障害）についての学びだけになっていたが，村社協内の障害者センターと連携を図ることで知的障がいについても知る機会を設けた。
・利用者が作成したはがきを使用して絵手紙交流することで，一方的な関わりで終わらせないようにした。

カリキュラムの評価

※「リフレクション（省察）」とは、『気付きを意識化（表面化）することの学び』であり、客観性があり反省・内省（振り返り）とはやや異なる。活動終了時だけでなく、他者との関わりの中で学習者が逐次気付きを意識化する方法や工夫を行いながら評価する。

【受講者のリフレクション（方法）】≪対象：小学６年生≫

実施中・「シャンプーボトルに突起がついていることに初めて気づいた」という児童同士で，他にも同じような工夫された商品がないか話し合っていた。
事　後・「紙を牛乳パックから作る工程を知り，協力して作業していることが分かった」との感想があり，実際に学校で紙漉き体験をすることになった。

【講師自身のリフレクション（方法）】≪対象：視覚障がい当事者　≫

実施中
事　後「今までの授業よりも詳しい内容で生活の様子を伝えたことで，これまでより質問具体的で多く出た気がする。」との話があり，動画について新たな内容を提案してくださった。

【関係者の変容】

受講者ほとんどの児童は今まで障がい者の方々と関わることが無く，最初は緊張した様子であったが，時間が経つにつれて積極的に質問する姿が見られた。
講　師動画を作成したことで，これまで見せられなかった生活場面や福祉用具について見せ方等の提案があり，福祉教育の講師としての意識が向上した。
その他関係者・地域自分たちの作業内容を小学生に知ってもらえたことで，作業へのモチベーションが上がった。

【総合評価（目的の達成度）】

これまで単発で実施していた福祉教育を，連続したカリキュラムの構成にしたことで，今まで関わることが少なかった障がい者への理解が深められた。
ただし，全ての学校でこれほどの授業数を確保することは難しいため，短時間でできるカリキュラムを検討する必要がある。